

能登駅伝を復活させよう

11班

要旨

過去に被災した地域では、地震の発生から時間が経過するほど、記憶の風化が進んでいることが分かっている。このことから、能登でも同様に、能登半島地震の記憶がこれから風化していくことが考えられる。そこで、風化防止のために何ができるかについて文献調査を行った結果、被災した各地で、風化防止の取り組みとして、フェスやマラソンなどのイベントが数多く開催されていることが分かった。そこで、本プロジェクトでは、過去に能登で「能登駅伝」が開催されていたことや、県議会で「能登駅伝」の復活が企画されていたこともあり、風化防止イベントとして「能登駅伝」を開催することを提案する。地震の爪痕が残る地点や地震から復興した地点を通るように意識し、コースを作成した。

1. 研究背景と目的

過去に被災した地域では、地震の発生から時間が経過するほど、記憶の風化が進んでいることが分かった。このような地域では、風化防止の取り組みとして、毎年フェスやマラソンなど、数多くのイベントが開催されている。一方、能登では、能登半島地震の発生から2年たった今でも、式典しか行われていない。このことから、このままでは能登でも同様に、地震そのものへの関心が薄れ、能登半島地震の記憶が少しずつ風化してしまうのではないかと考えた。さらに、能登地域は震災前から高齢化が進んでおり、震災を経験した人の多くが高齢者である。そのため、年々、能登半島地震での経験を伝えていく人が減少し、過去に被災した他の地域よりも、風化のスピードが速くなることが予測される。この課題に取り組む中で私たちは、過去に能登で「能登駅伝」が開催されていたことや、石川県議会が「能登駅伝」の復活を企画していることを知った。駅伝は、多くの選手や大会関係者、応援に訪れる人などが集まる大会であり、関心も高い。そのため、大会を通して能登半島地震について知る人が増えたり、能登の現状に目を向けたりするきっかけになると考えた。また、毎年大会が開催されれば、能登半島地震の復旧・復興のシンボルにもなり、地震の記憶を長く残していくことにもつながるのではないかと考えた。

2. 調査・分析

現在、能登地方の宿泊施設は、地震前の約半数しか営業を再開できておらず、復旧・復興作業にあたる支援者の受け入れが中心となっている。和倉温泉でも、20軒のうち約半数の9軒が営業を再開しているが、宿泊可能な客室数は全体の1,252室に対し370室のみとなっており、全体の約3割にとどまっている（図2）。また、地震被害の大

きかった奥能登地域では、多くの施設が休業または廃業しており、再開した宿でも、一般的な観光客の予約は地震前に比べて大きく落ち込んでいる状況である。このように、現在の状態では、観光客の受け入れは依然として厳しい状況にあることが分かる。また、道路の通行止め箇所は令和7年時点で13箇所であり、最大で135箇所あった時と比較すると解消されつつあるが、依然として復旧の途中であることが分かる。能登駅伝を開催するにあたり、道路の補修や公共施設の整備は優先すべき事項となる。その結果、インフラの復旧が加速すると考えられる。さらに、道路状況が良くなることで物資の運搬が容易となり、宿泊施設の営業再開も後押しできるのではないかと期待される。このように、能登駅伝開催の過程で、多くのメリットがもたらされると考えられる。

● 再開客室数
● 未再開客室数

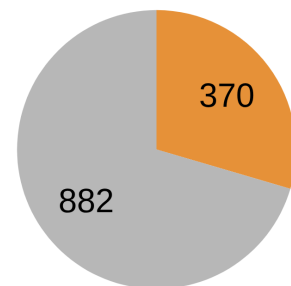


図2 和倉温泉宿泊可能客室数

3. 解決に向けた提案と実践

私たちは、能登半島地震の復旧・復興のシンボルにふさわしく、多くの人の記憶に残るコースを提案する。まず、スタート地点とゴール地点は、能登半島地震からの復興に向けて力強く前進している和倉温泉がよいと考えた。また、駅伝開催に伴い、宿泊客数が増加することが予想されるため、和倉温泉をスタート・ゴール地点にすることで、参加者や観客の熱気が高まることも期待できる。次に通過するのは、珠洲市に

ある見附島である。見附島は能登のシンボルとして有名で、浜辺には縁結びの鐘があり、「えんむすび一ち」と呼ばれている。空気の澄んだ晴れた日には、はるか遠くの北アルプスを望むことができ、夜にはライトアップもされるロマンチックなスポットである。しかし、能登半島地震の影響で、その姿は大きく変わってしまった。能登駅伝を通して、この現状を多くの人に伝えたいと考えた。次の通過点は青の洞窟である。ここの「聖域の岬」は、能登の語源となった「天へ登る仙人」が住んでいたと伝えられており、日本三大パワースポットにも選ばれている。この洞窟も見附島と同様に地震の被害を受けたが、変化した景観を楽しむことができる場所として復興が進められている。青の洞窟を通った後は、世界農業遺産に登録された白米千枚田に向かう。白米千枚田は、「先人たちが400年間守り継いできた能登の財産をここで絶やすわけにはいけない」と、被災者を含めた多くの人が復興に向けた活動を行っている場所であり、能登駅伝を通して、そのような被災者たちの思いを全国に届けたいと考えた。そして、最後に通過するのは羽咋郡志賀町にあるヤセの断崖である。ヤセの断崖は、1961（昭和36）年、2009（平成21）年に公開された映画の撮影地で、能登金剛の中でも人気のスポットである。ここも地震の被害を受け、景観は以前とは変わってしまったが、地域の方々や自治体の努力によって、イベントや観光案内が再開され始めている。私たちは、このコースを提案したい。

4. 考察

本プロジェクトが提案する「能登駅伝」の開催は、単なるスポーツイベントという枠を超え、能登地域が現在直面している「記憶の風化」「高齢化による伝承者不足」「地域経済の停滞」という重なり合っ

た課題に対して、非常に有効な解決策をもたらすと考える。まず、従来の式典のような静的な行事とは異なり、駅伝という多くの人が集まるイベントは、ランナーや観客、メディアを巻き込む強い発信力を持っている。地震への関心の低下や、高齢化によって震災の経験を語り継ぐ人が減っていくという課題に対し、外部から多くの人々を定期的に呼び込むことは、震災の記憶を地域内だけで終わらせず、社会全体で共有し続けるための持続可能な仕組みとなる。

特に、提案したコース設定には明確なメッセージ性がある。復興に向けて前進する和倉温泉をスタート・ゴール地点とし、地震で姿を変えてしまった見附島を経由することで、参加者は能登の復興の様子と震災の影響の双方を肌で感じることができる。このリアルな体験が参加者の記憶に残り、SNSなどを通じて全国へ拡散されることで、多くの人々が能登の現状に目を向けるきっかけになると期待される。さらに、このイベントは、深刻な状況にある地元の観光・宿泊業を活性化させる起爆剤にもなる。現在、能登の宿泊施設は観光客の減少や支援者の受け入れという課題を抱えているが、駅伝の開催によって大規模な宿泊需要が生まれる。これは、休業中の施設が営業を再開する強い動機となり、支援者中心の受け入れから一般の観光客向けの営業へと切り替えていく重要な契機となる。そして何よりも、この提案の実現可能性を高めているのは、かつて開催されていた「能登駅伝」の復活という歴史的な背景を活用している点である。ゼロから新しいイベントを作るのではなく、地域になじみのある大会を復活させ、さらに石川県議会でも企画されていたという土台を活用することで、地域住民の理解や協力を得やすくなる。また、行政側としても、公道の利用許可や予算の検討などがスムーズに進む可能性が高い。以上のことから、「能登駅伝」の開催は、震災の記憶を未来へつなぐ復興のシンボルとなるだけでなく、能登の経済再生と地域の活力を取り戻すための、極めて現実

的で効果的なアプローチであると考察できる。

5. 今後の課題と展望

私たちは、能登半島地震を風化させないために、能登駅伝を開催することで期待できる効果や能登駅伝の概要などについて考えてきた。一方で、調べていく中で、複数の課題があることが分かった。まず、長距離の駅伝大会では広範囲にわたる交通規制が必要となるため、住民生活への影響が出ることが挙げられる。また、給水所や中継所、医療スタッフ、ボランティアの確保など、安全に大会を運営するための体制づくりも必要である。さらに、大会運営には多額の費用が必要となるため、自治体だけでなく、企業スポンサーや地域団体などからの支援を検討する必要がある。加えて、現在も復興工事が続いている地域では、道路状況やインフラの整備状況が変化するため、実際の状況に応じてコースを見直すことも重要である。これらの課題を踏まえて、石川県の子ども・若者意見箱に、私たちの考えを伝え、石川県の意見をいただきたいという内容のメールを送信したところ、私たちの概要を見たいという返信が来たため、作成した資料を送信した。今後は、私たちが送信した資料をもとに返信された回答を参考にしながら、能登駅伝開催に向けた課題の解決策や改善点、詳細について考えていくとともに、石川県の協力が得られれば、開催に向けて連携していきたい。

6. 結論

本研究では、能登半島地震の記憶の風化防止、および地域の復興や観光業の促進を目指し、過去に開催されていた能登駅伝の復活をイベントとして提案するとともに、具

体的なコース案の策定と、開催に伴う影響の調査・分析を行った。本プロジェクトで提案した、地震の爪痕が残る地点や復興した地点を巡る駅伝コースは、全国からの参加者や観客が能登の現状に目を向ける契機となり、記憶を長く残していくための復興のシンボルとして高い意義を持つと考えられる。一方で、調査・分析の結果、現在の能登地方の宿泊施設は地震前の約半数しか営業を再開しておらず、復興支援者の受け入れが中心となっている実態が明らかになった。特に和倉温泉においては、宿泊可能な客室数が全体の約3割にとどまっており、奥能登地域における休廃業の影響もあわせて、現時点で一般的な観光客を大量に受け入れることは依然として厳しい状況にある。実際に250km程度の規模の大会を開催するにあたっては、宿泊施設の確保、運営資金やスポンサーの調達、ボランティアや救急医療体制の構築など、現実的な運営上のハードルも多く存在する。今後は、開催時期の調整や段階的な受け入れ体制の構築といった解決策を検討するとともに、駅伝開催に伴う観光客の増加や地元経済への波及効果について、さらに定量的な検証を深める必要がある。

7. 参考文献・協力団体

石川県「能登駅伝開催基本計画策定業務委託仕様書」（石川県HP）

大久保英哲 編著『箱根駅伝を超えようとした幻の「能登駅伝」』（能登印刷出版部、2019年）

月陸Online「石川県が学生三大駅伝と言われた『能登駅伝』の復活を検討」（2025年1月7日記事）

北陸朝日放送「【能登復興のシンボル“能登駅伝”】「最も早く29年以降」 復旧状況などから

石川・馳知事が見解」（2026年2月9日報道）